

創造的復興研究会 WG 1第2回会合

「地域の価値」をどうつくりだすか

2021年9月16日(オンライン)

よけもと まさふみ

除本 理史

(大阪市立大学)



除本・佐無田 (2020) 『きみのまちに未来はあるか? —
「根っこ」から地域をつくる』岩波ジュニア新書

「地域と関わる」生き方

(除本・佐無田, 2020, pp.v-vii, 5-10)

- 近年、地域との「最低限のつきあい」の範囲を越えて、地域と積極的に関わろうとする人たちが増えている。
- 自分が生まれ育った地域に限らない。都会で育った若い世代のなかで、あえて地方に移住し、地域と関わって暮らすことを選択する人たちが目立つようになってきた。
- また、移住する「定住人口」にはいたらないものの、観光にくる「交流人口」よりは深く地域に関わる「関係人口」という概念も出てきた。
- これらは「ローカル志向」「田園回帰」などというトレンドとして注目されている。

「ローカル志向」「田園回帰」 という潮流



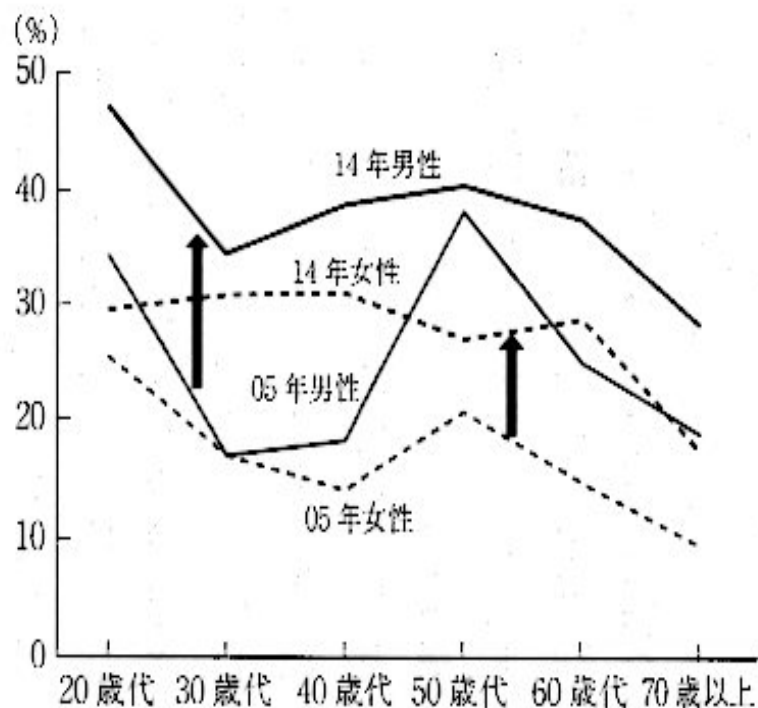


図5-1 農山漁村に対する定住の願望を持つ人の割合(内閣府世論調査, 2005年と2014年)

注: 1) 資料=内閣府「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」(2005年実施)及び同「農山漁村に関する世論調査」(2014年実施)より作成。

2) いずれも、「あなたは、農山漁村地域に定住してみたいという願望がありますか」という問いに対して、「ある」、「どちらかという」とある」という回答の合計の構成比。

比較的若い世代
で地方移住志向
が上昇

(除本・佐無田, 2020, p.7)

なぜ「ローカル志向」「田園回帰」か？（除本・佐無田, 2020, pp.vii-viii）

• 「暮らしの豊かさ」の問い直し⇒

「地域の価値」への気づき

= 地域における人びとの営みの蓄積
（社会関係資本、伝統、文化、環境・景観〔農地、里山、まちなみなど〕といった地域固有のストック）が暮らしを豊かにする

「モノづくり」から「コトづくり」へ

- **認知資本主義**(cognitive capitalism)における「**価値**」= 「モノ」の量的な豊かさを求めるのではなく、それによって得られる「知識」や心温まる「感動」といった**無形の要素**を重視
- **芸術作品の例**) 時間が経つと「モノ」としては劣化しても、歴史的な評価に耐え、生き残ることでむしろその価値は高まる
- あるものを使う**地域のリノベーション**
建物だけでなく「地域」全体にもリノベーションの考え方が必要



地域のリノベーション

- 大阪の長屋リノベ：一時期は価値が認められず、老朽化が進むにつれ取り壊されてきた。近年は、レトロな雰囲気やコミュニティ感覚が再評価されて、住居、店舗、事務所、宿泊施設などにリノベーションされている
- **地域のリノベーション**： 地域固有の自然や景観、伝統、文化、コミュニティなど、暮らしの豊かさを支えるストックの意味を再評価し、地域の資源とする。巨額の設備投資によって空間を新しく作りだすよりも、地域の文脈を読みこみ、再解釈して、求められている「生活の質」や「地域らしさ」を表現することがむしろ現代的な開発手法

誰が「地域の価値」を創るのか

- すでにあるストックを有効活用したり、その辺にある自然空間や生活文化そのものに意味づけをしたりして価値を高める活動は、狭い意味の「経済活動」だけではない。自分たち自身が楽しみながらやる学習、文化、福祉、スポーツ、ボランティアなどの自発的活動も含まれる。
- 企業家だけが価値を創り出すのではなく、市民運動家や自治体職員もまた地域の「創造性」の担い手。

「**困難な過去**」(大事故、戦争、災害など) も「**地域の価値**」を構成しうる

- 被害回復、復興のプロセスがストーリー価値を構成する
- But「意味づけ」が立場によって分裂しやすい
⇒ 多様な立場をふくむ開かれた議論の場が必要
- 地域内での学びと共有
- 教育、観光資源⇒よりよい社会をつくる(次スライド)
- モノに対するストーリー価値

「困難な過去/歴史 difficult history/ past」とその「効用」

「困難な歴史」を解釈(解説)(interpretation)
することの便益(Rose, 2016, pp.48-62)

- 希望を醸成する
- 記念・祝賀・称揚⇒アイデンティティの創出(個人、集団)
- 社会的正義の擁護
- 喪に服すること: 「死」に意味を与える。
歴史的な目印や伝承施設の開設は、遺族の悲しみを和らげる
- 「このようなことを繰り返してはならない」
と考える人を増やすことが、償いになる
(pedagogical reparation)



公害地域再生の事例

水俣「もやい直し」(1990年代～)の経験から(2章)

■水俣市は典型的な「企業城下町」

- ・水俣病患者が、生命や健康を侵害されたことへの償いとして、チツソに対し正当な補償を求めた。
- ・しかし、多くの市民は、企業が衰退して生活がおびやかされることを心配。本来、多くの市民もメチル水銀の影響を受けた被害者だった。
- ・にもかかわらず、被害者と加害者との関係が、被害者と地域全体との対立関係におきかえられてしまい、住民同士が立場の違いによって反目させられることになった。

■公害による地域社会の崩壊を乗り越え、地域の再生をめざすため、当時の吉井正澄市長は「もやい直し」という標語をかけた⇒水俣病の「前面化」、地域固有の価値

「もやい直し」の意義(pp57-9)



〔地域の〕個性とは、他をもって代えることのできないその地域における価値です。ほかのことで代替できない価値です。・・・たった一つ、水俣にしかない個性があります。それが**公害の原点**と言われる**水俣病**ですね。・・・**これこそが水俣の個性だと思います。**

ところが、この個性は今まで水俣市民を苦しめてきた、すごく強烈なマイナスの個性だったんですね。**これがまちづくりに役立つのかとだいぶ批判されました。しかし私は、逆だと思っていますよ。**(吉井正澄・元水俣市長)

① 教育旅行誘致 教科書pp63-8

表-1 水俣市観光入込数（1998 年，2017 年） 単位：人

		(A) 1998 年	(B) 2017 年	A-B
湯の児地区	宿泊	123, 666	38, 025	85, 641
	日帰	253, 661	75, 479	178, 182
	計	377, 327	113, 504	263, 823
湯の鶴地区	宿泊	12, 622	6, 046	6, 576
	日帰	22, 557	18, 154	4, 403
	計	35, 179	24, 200	10, 979
その他地区	宿泊	49, 166	39, 054	10, 112
	日帰	257, 295	333, 602	▲76, 307
	計	306, 461	372, 656	▲66, 195
宿泊計		185, 454	83, 125	102, 329
日帰計		533, 513	427, 235	106, 278
総計		718, 967	510, 360	208, 607

注：1998 年は出所資料中で観光入込数が最多の年。▲は負数（観光入込数の増加を示す）。

出所：「水俣市観光入込数（昭和 57 年～平成 29 年）」（水俣市経済観光課提供資料）より作成

減少傾向だが市人口2.5万人の20倍

- 水俣病の学習（水俣市立水俣病資料館入館者数：2017年度は4万1250人）を観光振興と結びつける努力
- **環不知火プランニング**：2017年度受入実績：教育旅行が2292人，視察研修が622人（うち地域内宿泊がそれぞれ925人，73人）
- **相思社**の2017年度受け入れは570人





② ガイアみな また/きばる pp68-73

甘夏のない人生なんて。

生産者グループきばる

[トップページ](#)

[きばるについて](#)

[生産者の紹介](#)

[販売のこ](#)



きばるのウェブサイトへようこそ！

熊本県水俣、芦北、御所浦で甘夏みかんをつくりつづける生産者団体です。

- 「**ガイアみなまた**」は、夏みかん(甘夏)の加工、販売などを手がけている。有限会社の形態をとるが、複数の家族による「共同体」。
- 甘夏を生産するのは「**生産者グループきばる**」。前身は「水俣病患者家庭果樹同志会」で、海で生計を立てられなくなった患者たちが甘夏生産に転換し、**減農薬・有機栽培**を開始(「水俣病被害者が加害者にならない」)。
- 樹園地は水俣市、芦北町、津奈木町、天草市にまたがり、これら2市2町の夏みかん生産量のうち「きばる」のシェアは6.2%(2017年収穫)。

- 甘夏の大口取引先は、相思社時代からの付き合いがある生活クラブ生協。生産者交流会で、「きばる」メンバーが水俣病について語りながら、共同購入を促す。減農薬栽培であるため、安心して皮まで食べられるというのもセールスポイントの1つ。
- 価格は類似の有機栽培品と比較して安いわけではないので、購入する側からみれば、**水俣病にかかわる甘夏の由来の「物語」が付加価値になっている**という面がある。

「生産の世界」論と「個人間の世界」



図 3-3 ストーパーとサレの「生産の可能世界」

(出所：ストーパーとサレ (Storper and Salais 1997：33) より作成)

まとめ

- 1つの大きなプロジェクトではなく、**多様なスモールビジネス**の叢生（その意味では「わかりやすい解」ではない。別途「世界遺産化」のような大きな目標の意義）
- 生産者・消費者による「**学習コミュニティ**」をつくり、価値理解を促す
- 「困難な過去」を**価値に反転**させることで、分断を修復し、ビジネスや地域振興につなげる（cf遠藤邦夫『水俣病事件を旅する』国書刊行会、2021）

- **地域プラットフォーム**

人びとが水平的につながる新しいネットワーク

どの組織や階層に属しているかに関係なく、個人が共同の場を使って、同じ価値観を持つ人とつながって何かを始められる

- **多業的な暮らし方**

「兼業サラリーマン」＝に何日間かはサラリーマンとして働いて、高所得ではなくとも一定の安定した収入を得て、社会保険にも入りつつ、残りの時間で個人事業主としての仕事をしたり、地域の共同的な活動に関わったり、自家消費用の小規模な農作業をしたり、自分のスキルを磨いたりする、多業的な働き方

- **地域のOJTで職業能力を磨く**

- **コミュニティの支えあいが起業をうながす**